

Book Review

座右の書から思い出の本まで、リレー形式でつなく読書案内。

玉川で教える先生方に「この1冊！」を紹介していただきます。

今月
は

リベラルアーツ学部 勝尾彰仁先生

人間の「感情」こそが 世界の対立を解決する 鍵となる



『感じる脳』

——情動と感情の脳科学

よみがえるスピノザ』

アントニオ・ダマシオ 著
田中三彦 訳

●ダイヤモンド社

人間における「感情」の存在は、理性を乱しこそすれ洗練するなど到底あり得ない、本能的で劣った「動物的な属性」であるところまで考えられてきた。しかし、事実は正反対であり、感情こそ「お荷物」どころか、もっとも進化した高等動物である人間において、極めて洗練された「倫理装置」なのだと著者ダマシオは言う。

彼によれば、その装置は二層構造によって働いている。それは、

(1) 脳という「心の管制塔」に、遭遇した状況の快・不快についてのレポートとして身体から随時提出される体内の生理化学物質のバランス情報を提供する。

(2) そのような情報に関する過去の記録が、新しく発生した類似の状況に遭遇したときに、知識として取り出せるような脳神経系の「データベース」を構築する——の二つである。

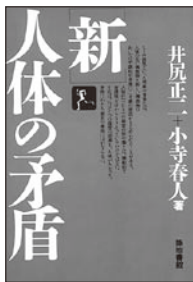
特に2番目のデータベース機能は、社会性動物としての人間

の発達にとって決定的なものだった。なぜなら、個人がある時点で遭遇している状況について、将来の行動予測を身体反応というレベルで展開できれば、その結果は「同じ身体的特徴をもつ」他人の似たようなケースへの行動学的な応答を予測する際参考にできる。

そして、このデータベースを言語や運動など脳が持つ他のコミュニケーション能力と併用することで、社会集団レベルの「状況評価情報」として、メンバーの間で共有・共感することが可能となったからだ。

300年以上前、哲学者スピノザは著書『エチカ』で「人間の心は人間の身体の観念である」と喝破した。現代の地域間紛争に根を張る、倫理観や正義論の深刻な対立という問題に建設的な解を見出すために、「情動と感情の脳科学」がその主役として注目を集める日は確実に近づいているように思われる。

これもおすすめ



『新・人体の矛盾』
井尻正二+小寺春人 著
／築地書館
●35億年前に「発明」された血液。4万年前に出来たばかりの人類特有のアゴの骨。地球環境の変動とその進化への想像以上の影響。では、現代文明はわれわれをこの先どのように進化させていくのだろうか？



『ヤバい経済学』
——悪ガキ教授が世の裏側を探検する』
スティーン・D・レヴィット&スティーン・J・ダブナー 著／望月衛 訳／東洋経済新報社
●経済社会の矛盾とは？相撲取りと学校の先生の共通点など、不思議な人間の社会的行動をデータから解剖する。



『気前の良い人類』
——「良い人」だけが生きのびることをめぐる科学』
トール・ノーレットランダーシュ 著／山下文 訳／アーティストハウス
●利他主義は高度なエゴイズムであるという挑発的なテーマを基に、21世紀の経済的課題を考える野心的な書。

次回は脳科学研究所の松田哲也先生です